

う わ かい かり はま 宇和海狩浜の段畑と農漁村景観

No.38-03

所在地：愛媛県西予市 選定年月日：平成31年2月26日 面積：804.2 ha 選定基準：二(一)(一)(四))

(1) 概要

愛媛県南西部に位置する狩浜は、宇和海(うわかい)に面するリアス海岸の入江の集落で、近世の狩浜浦を引き継ぎます。元は鰯漁を営む漁村でしたが、その浮き沈みを農業で補う中、甘藷(かんしょ)や麦から櫛(はぜ)、養蚕へと作物を転換してきました。現在はみかん栽培を主要な産業とし、漁業も入江の利点を生かした真珠養殖等が行われています。

当地では、近世の鰯漁と、近代の養蚕業の隆盛を通じて人口が増え、山腹に畑地を広げ、入江、居住地、段畑、山林が連なる壮大な景観が形成されました。急斜面に広がる段畑は、所々に露頭する石灰岩を用いて農民が築いてきたものであり、幾段にも重なる灰白色の石垣がみかんの緑や橙に彩られて際立つ眺めを作り上げています。

このような景観は、春日神社の秋祭りが地域の結びつきを保ち、また、昭和50年頃から進められている有機農業がまちづくりへと繋がる中で維持されてきました。

宇和海狩浜の段畑と農漁村景観は、黒潮の影響を受ける愛媛県南西部のリアス海岸における土地利用を示し、また風土に根ざした斜面地農業の展開を伝え、我が国における生活や生業の理解に欠くことのできないものとして重要です。



上空から見た狩浜地区



入江、居住地、段畑、山林が連なる景観

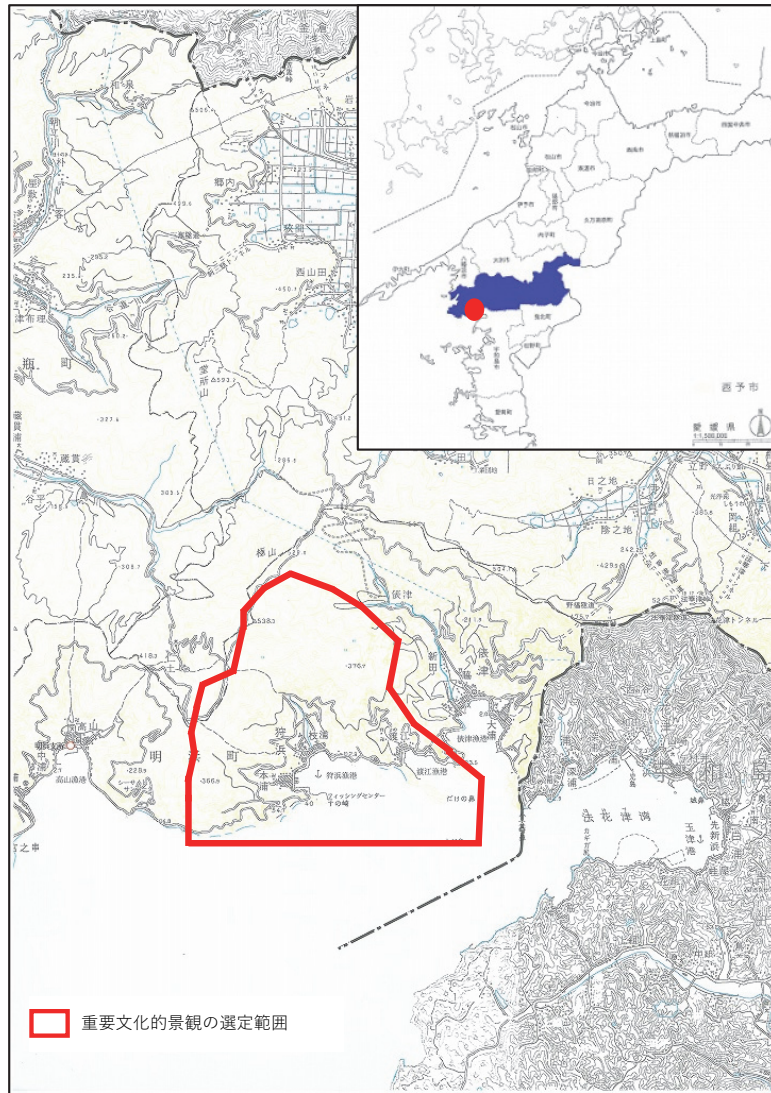


石垣とみかん



春日神社の秋祭り

(2) 選定範囲



- 重要な構成要素：224件

（３）選定による効果

選定前の調査段階において実施した住民参加型ワークショップは大いに盛り上がり、住民が文化的景観の取り組みや景観に対する理解や興味を深める好機となりました。選定後の現在もワークショップを実施し、住民が地域について考え直す機会を創出するとともに、住民意見を踏まえた整備事業を積み重ねていきたいと考えています。

また、選定後に策定した整備計画では、地域でどのように景観を守っていくかをまとめ、これに基づきながら景観の保存・活用に関する取り組みを進めています。重要な構成要素については、現在、集落の主屋やオリや養蚕などの建造物の修理を順次行っていますが、選定後一番に住民にとって重要な秋祭りの拠点である春日神社を修理できたことは、選定による大きな効果の一つと捉えています。



住民参加型ワークショップの様子



修理後の春日神社拝殿

(4) 保存活用計画などの基礎情報

- ・ 西予市文化的景観調査成果報告書(平成30年3月、西予市教育委員会)
- ・ 宇和海狩浜の段畑と農漁村景観保存活用計画(令和2年10月、西予市教育委員会)
- ・ 宇和海狩浜の段畑と農漁村景観整備計画(令和2年3月、西予市教育委員会)
- ・ ホームページ <https://www.city.seiyo.ehime.jp/miryoku/seiyoshibunkazai/keikan/10498.html>

(5) 活用事例

事例38-03 ①

保護に関わる人の輪を生み出した、保存調査とワークショップ

文化庁補助金

●行政による取り組み

選定前の保存調査のためのチームには、専門家に行政職員も加わりました。また、住民で構成された「狩浜地区文化的景観協議会」や地域づくり組織「かりとりもさくの会」をはじめとした多数の住民の方々に、ヒアリングや報告書の執筆など、様々な形で協力を得て実施しました。

加えて、調査と並行してワークショップを開催し、関係者が、現地で学び、魅力を再発見し、守り活かしていくために語り合う場としました。

この過程に関わった人々は、狩浜の歴史文化に関する理解や文化的景観をずっと残していこうという意識が深まり共有されたと受けとめています。

狩浜地区文化的景観協議会会長の声

私らにとっては普通場所。でも、大学の先生などが「この段畑にはかなり値打ちがある」と言うてくれました。それを聞き、私らも「まちづくりに活用したい」と思うようになり、住民皆で文化的景観の申出を決めました。

西予市文化的景観担当者の声

調査やワークショップを通じた調査チームと住民との交流が、調査をより一層深みのあるものになりましたし、その後の文化的景観の保存や整備に関わる場面でもとても大事なことだったと思います。

1回	教えてください！狩浜の「いえ」と「みず」	建物・井戸・水路等につわる暮らし方の共有。年配者が若者へ暮らしの様子を伝える機会となった
2回	暮らしめぐり ～うみ・やま・さとに隠れた狩浜の謎を追う～	調査で把握された魅力をまちあるきを通して発見・共有
3回	狩浜の履歴書と自己PR ～住民目線の狩浜らしさ～	古写真をもって現地を訪ね、今との違いや思い出、残したい風景を語り合う
4回	かりはま暮らしのいかし方・まもり方 ～うみ・さと・やまをつなぐ石積みの物語～	石工から、現地で石積みの特徴を学び、現状把握、守り活かす方法を語り合う
5回	かりはま採集たんけん隊	次世代を担う親子世代を対象に、景観構成要素をスケッチなど採集することを通して観察

ワークショップ「うみ・やま・つながりはま暮らし講」のテーマ



調査とワークショップの成果は、分かりやすく見て楽しい形で共有（調査報告書より）



住民・専門家と学生・行政などが参加



職員と学生のチームでのヒアリング



海の生き物調査は住民も船を出して協力

① 地域内での
魅力の共有

② 目標性の共有

③ 地域外への
広報

④ 魅力を引き
出す

⑤ 資源の
確保と運用

⑥ 人づくり・
育て

(5) 活用事例

事例38-03 ②

かりとりもさくの会による、修学旅行生向け滞在・体験プログラムの提供

●住民や団体等による取り組み

狩浜地区と、隣接する渡江（とのえ）地区はあわせて「狩江（かりえ）」と呼ばれます。「かりとりもさくの会」は「1000年後も楽しく暮らせる狩江」を目標とし、地域の特徴を生かした様々な活動を展開している地域づくり団体です。

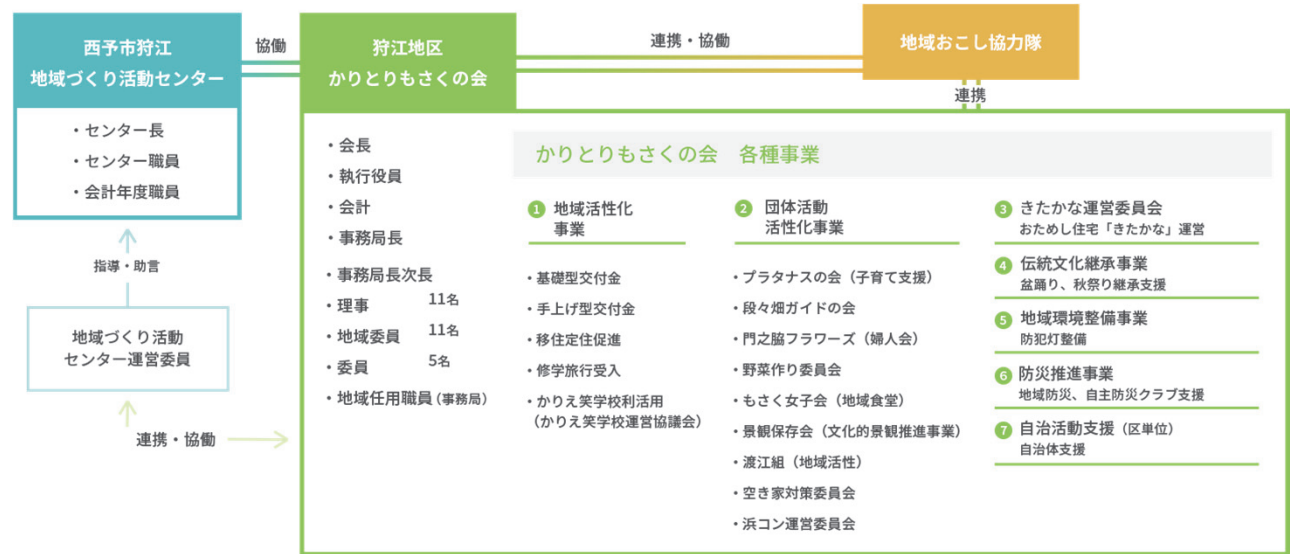
その活動の一つ「民泊プログラム」では、来訪者が一般家庭に泊まりながら、柑橘収穫体験、漁船クルーズ、カゴ漁体験、真珠アクセサリー作りなどを通して狩江の暮らしを体験できるメニューを用意しています。このプログラムは修学旅行でも活用されており、都市部の児童生徒が自分の手でミカンを摘み、魚を捌くという“非日常体験”を楽しんでいます。

保護者の声

とても貴重な体験をありがとうございました。日常では出来ないことばかりで、親の方が心配していましたが、少したくましくなって帰ってきた感じです。ありがとうございました。

団体等情報：かりとりもさくの会

<https://karitorimosaku.jp/>



「かりとりもさくの会」組織図

農を生業とする者は、傾斜地を開き、石を割り、積み上げたこの段畑を讃えよ。
漁を生業とする者は、「千古不伐」と守り続けた魚付きの林を子や孫に語り継げ。
商を生業とする者は日向まで縞を売り歩いた狩浜商人に倣え。
工を生業とする者は、山深く眠る大石積みを残し、築港に請われた職人の技に学べ。

かりとりもさくの会の「狩江人に告ぐ」
（設立宣言より抜粋）



就学旅行などの受入の様子。過去3年間に
R3:3校(130人)、R4:6校(285人)、R5:4校(131人)を受け入れ